

オプション教材ライラック 読解マラソン集



読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
http://www.mori7.net/marason/ki.php

1.

2.

3.

4.

5.

母の死後、半年ほどすると、姉に縁談えんだんが起こった。姉も好意を持っていた人で、話はすぐにきまり、挙式いっしゅうぎは一周忌がすんでから、ということになった。

自分の姉でしかなかった姉を、ぼくはあらたまった気持ちで、見なおすのであった。兄となるべき人も、家へ遊びに来るふうになつて、三度に一度は、ぼくを加えた三人で、郊外こうがいへ散歩に行ったり、映画をみに出かけることもあった。その人と二人で居る時は、ぼくはその人に好意を持ったが、姉が加わると、心の底にきつと沸わいてくる、悲しさに似た感情を、ぼくはどうにも出来ずに居た。

嫁入り道具よめいが、日増しにそろって行つた。

姉が一時に大人びて映り、まぶしく見えることもあった。母の死が別離べつりの日の悲しみや、父と共々この家に取り残されるさびしさに変わって、激しく胸を打たれる日もあった。

ある日曜日の午後であつたと思う、ぼくは姉と親せきへ行つた。その帰りみちに、姉が何気ない風にいった。

「節ちゃん、あたしが居なくなつても、さびしくない？」

「ぼくはだまつていた。」

「お父様だつて、お困りになるわね」

しばらく間を置いて、姉は思い切つたように、言葉をつづけた。

「あたし、節ちゃんに相談があるの。——鵠沼くけぬまの、桂おばさま、ね、知つてるでしょう？」

「知つてるよ」

突然とつぜんのことで、姉が何をいおうとするのか、ぼくには分からなかつた。桂おばさまかつらというのは、死んだ母の遠縁とつせんに当たる、母より三つ

四つ若い、美しい人であつた。前にもいつたが、母が逗子ずしで療養りようようしているころ、つき切りに看病をしてくれた人だ。結婚けっこんして二年ほどで、夫に死に別れた、ということはそこから聞いていた。

「桂かつらさんに、——あたしの代わりに、家へ来ていただいだらと思つたの。お父様に話したら、節雄せつおがよければ、つておつしやるのよ」ドキンとした。みんな、自分をかわいがつてくれる人は行つてし

まつて、お体裁に、代わりの人を置いてゆこうとしている。——そんな氣もした。

「ぼく、いやだ」

そういえば、桂かつらさんはこのごろ、二三度家へ遊びに来ている。自分には何もいわず、みんなでそんな事を進行させていたに違ちがいない、——そんな風にも想像とつぜんした。

「このこと、あまり突然だから、あなたにはのみ込こめないかも知れないけど、あたしがお嫁よめに行つてしまつたら、お父様だつて随分ずいぶんお困りになるし……」

「お父様は勝手に旅行してればいいさ」

ぼくはすげなくいい切つた。姉はさびしそうに、そのまま黙だまつた。

(永井龍男ながいたつお「胡桃割りくるみ」)



日本人の文化は、共感の文化であるといわれる。共感とは、発声されたことばを必要としない。目を見合えば、相手の心の動き、感情がわかり、「目は口ほどにものを言う」。日本人の目は視覚器官であるばかりか、人間の感情を表現すべき重要な言語器官でもあるから、「目くばり」には常に留意する必要がある、めつたやたらに他人に対し視線を向けてはならない。電車の中で腰掛けている人々がいつせいに眠っているのは、まさに世界の奇観であり、日本にきたことのあるパリのお嬢さんは、「本当にびっくりした。」と語っていたが、これは、単に日ごろの疲労や栄養不足からくる習性とはかりは言い切れまい。目と目を合わせてはならぬという、いわば意識下の意識が、座席に腰を下ろしたとたんに作動し、条件反射的に人々を眠らせてしまうのだ。

日本人は、したがって、「対話」によって自他の相違点と共通性を確認することを好まず、またその必要もなく、外国語は常に不得手である。彼は、独り「文字」を読み、独り写真を撮り、独り映画を、独りテレビを見たとしても、内心で日本人を共感し合うことができる。したがって彼は、日本国内、日本人集団のうちにあって初めて人間としての価値をもちうる。そして、いったんこれから離れたが最後、赤ん坊同然となり、あたかも虎や狼のいる森の中に独り置かれたときのように、周囲の「外人」に言い知れぬ恐怖感を抱かざるをえないことになる。

つまり日本人にとっては、ことばがなくても通じ合う者だけが、とどのつまりは人間なのであり、それぞれ相手の目の中から、一瞬のうちに自分に対する好意・敵意あるいは無関心を読み取る。まさに、「目は心の窓」であり、集団を形づくっているのは、このような

情緒反応である。それ以外のもの、例えば互いの意思を確認し合うための言語などは、本来的な必要性をもっていない。仲間うちとわかれば親しげにおしやべりが始まり、仲間でないとかれば形式的なことばが交わされるか無言かのどちらかがあるにすぎない。仲間うちであらうとなかろうと、人間関係にとつてだいじなのは「見合い」の情緒反応であり、「話し合い」のことばは、あってもなくてもいいもの、余計なもの、あるいはいらぬらしいもの

のとしか受け取らない。

言語により形づくられる欧米の思想は、一人一人がはっきりした声で自己を表現するところから生み出されたものである。日本人の場合、内心ではそれぞれ違った考えを抱いてはいるのだが、それは決して声にならず、結果として情緒的な一体化が生み出される。したがって、個人的には不平・不満がいつぱいありながら、国単位・地方単位・企業単位・部課単位で統一的人格が構成されるために、本来個人的であるべき欧米の諸思想は、結局、「借り着」でしかない。菅原道真の唱えた和魂漢才が、幕末・明治以来、和魂洋才に形を変えたとはいえ、実質は、九世紀以来、どれだけ変化したといえるだろうか。日本人は、コミュニケーションの手段としての言語を本来の意味ではもっていない。

イギリスでは今なお、例えばロンドン塔の前などで、小さな個人演説会が開かれている。人々は、弁士の話に熱心に聞き入り、議論し合う。傍らには、サンドイッチやコーヒーを売る屋台も店を出している。この情報化時代にそんな牧歌的なミニコミが何になる。年寄りの暇つぶしにすぎないではないか、と受け取るむきが多いかもしれない。しかし、その神経はおよそ正常とはいいたい。

マスコミの時代、情報化社会の時代であればこそ、このような個人レベルでの日常的議論が必要なのだ。マスコミの独占的な世界操作をチェックし、無意識的にせよマスコミが犯す過ちを防ぐため

に、また、自らが情報のうず巻き込まれて、風に舞う木の葉のごとく右往左往するはめに陥らないために、ほかにどんな方法があるというのか。議論すなわちことばによる闘争を通して、私たちは、初めて自分と他人との相違と共通性を明確に認識し、そこから相互依存の共同生活の論理を発見していくことができる。そして、個々人すべてがこうして自らを客観化しえたとき、初めてマスコミは自らのものとなり、いたずらに過剰な情報に振り回されることなく、これを、自分なりに整理しうる強靱な精神態度、主体的な知性が存立可能となるのだ。

(木村尚三郎の文章)



イギリス人は、なぜお茶に砂糖を入れるという、とんでもないことを考えたのでしょうか。

はじめの理由は、こうだったはず。まだシェイクスピアが生き、いた十七世紀のはじめごろであれば、砂糖も茶も薬屋で扱われる貴重な「薬品」でありました。したがって、病気でもないのにそんなものを用いるのは、貴族やジェントルマンといった高貴な身分のあかしのためか、大金持ちの貿易商人などが、みえをはってのことではなかった。つまり、茶や砂糖は、「ステイタス・シンボル」だったのです。

とくに、このころからだんだん豊かになってきた商人たちは、自分たちの財力を誇るために、ぜいたくをほしいままにしましたから、その上の社会層にあたる貴族やジェントルマンたちは、それ以上にぜいたくな生活をしてみせなければ、体面を保つことができなかったのです。このような派手な消費生活の競争は、邸宅の建て替えやファッションの面ではなはだしかったのですが、十七世紀のはじめに、ジェームズ一世が身分によって消費生活を規制する法律を全廃してしまうと、ますます競争が激しくなりました。

しかもこの時代には、アントウェルペンなどの国際的な市場から、アジアやアメリカ、アフリカなどの珍しい商品が輸入されはじめましたから、貴族やジェントルマン、豊かな商人たちは、競ってこうした「舶来品」を使っていたのです。外国からきたもの、とくにアジアやアメリカからきたものは、高価だっただけに、何でも「ステイタス・シンボル」になりやすかったのです。タバコでさえ、はじめは上流階級のしるしとして利用されたくらいです。なかでも、茶や砂糖はその典型でした。

ですから、紅茶に砂糖を入れれば二重の効果が期待できるわけで、これはもう文句なしの「ステイタス・シンボル」になったはずなのです。じつさい、十七世紀のイギリスの料理では、ありとあらゆる種類の香料をふりかけるのが大流行となりましたが、これも、香料が同じ重さの銀と同じくらいの値段だといわれたからこそ、つまり「ステイタス・シンボル」であつたからこそ、なのです。つまり、紅茶に砂糖を入れたのは、いまの日本でも、味がよくなるとはどうてい思えないのに、上等の日本酒に金箔を入れて飲む人がいたりするのに、多少似ているのかもしれない。

先にもふれたように、イギリスでは、お茶を飲む習慣は、どこよ

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

りも王室からはじまりました。十七世紀中ごろのイギリスでは、オリヴァー・クロムウェルをリーダーとするピューリタンとよばれた人びとが革命を起こし、政権を握りました（ピューリタン革命）。その革命を逃れてフランスに亡命していた前国王の息子チャールズが、一六六〇年に帰国して国王チャールズ二世となりました（王政復古）。ところが、彼の妻となったキャサリンといえば、ポルトガル王室の出身で、インドのボンベイという島を、持参金としてイギリスにもたらしたことで知られています。しかも、お茶を飲む習慣も、彼女がイギリス王室にもちこんだものといわれています。アジアと関係が深かったポルトガルでは、すでに王室でお茶を飲む習慣があつたといわれ、キャサリンはイギリスでも同じことをはじめたわけです。

だから、イギリスでは、お茶を飲むことは、王室で行なわれている「上品な」習慣ということになり、とくに貴族やジェントルマン階級の女性たちに、もてはやされることになったのです。当時の貴族は、連日のようにパーティーをくり返していましたが、二次会になると男女が別々になるのがふつうで、男性たちが深酒を重ねて酔いつぶれるのに対して、女性たちは、お茶を飲みながらゴシップに花を咲かせるのが通例だったといわれています。

いずれにせよ、ティー・パーティーは「上品な」ものということになりましたから、東インド会社も抜け目なく、毎年、新茶を王室に献上し、「王室御用達」の茶、王妃も貴族の夫人たちも飲んでいるお茶、としてひろく宣伝に利用したといわれています。

けつきよく、茶と砂糖という二つのステイタス・シンボルを重ねることで、砂糖入り紅茶は「非の打ち所のない」ステイタス・シンボルになったのです。

（川北稔「砂糖の世界史」）



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

私ども彫刻に志すものが、人の顔を見て先ず心をひかれるのは、皮膚や髪の毛の色とか、目鼻だち口もと等のこまかいところよりも、もっと根本的な彫刻的美しさにあります。すなわち一つの塊りとしての美しさ、凸凹、面、線等がつくる美しさであります。

人の顔は、たとえば巧みを極めた、不思議な技法でつくられた建築です。目鼻や口はこの建築の細部の装飾のようなものでしょう。この建築の構造の不思議なこと、容易に人のうかがい知るを許さぬ処です。この秘密を開く事そこに私どもの苦しみも喜びも一にかかっているのであります。

先頃八月の初旬、信州に彫刻の講習会がありました。どういふ方法でどんな風にやつたらよいものかと、最初に相談を受けました時、私は人の顔について研究する事をすすめました。生人のモデルと塑造台と粘土を用意して置く事、そして一人のモデルに研究者は八人位を限りとし、各自モデルについて見るところを粘土を以てつくつて見る、粘土をひねつてはモデルを見る、こういった方法で勉強を続けて行つたら、その間にだんだん彫刻の会得も出来て行くでしょうと答えて置きました。

人の顔なら誰しも平生見馴れている処ですから、取りつきにくい事もないでしょう。しかし実際にこうしてやり出して見たら、平生見慣れている人間の顔が実はどんなにむつかしいものかという事に気がつくでしょう。それは平生ぼんやりものを見ているからです。で、こうしてだんだんものを見る修行が積まれてくると、見馴れている人間の顔にも、実に微妙にして複雑極まるいろいろな仕組みのある事がわかって来ましょう。して見れば、毎日同じ顔の人間の顔を見てくらすという、一見つまらなさそうな仕事も決して無意義ではありませんまい、となおい添えて置きました。

考えて見ると私は人の顔を見る事が余程好きのようです。以前、私は長らく苦しい境遇に置かれていました。ほとんど慰めのない生活でした。その中にあって、唯一の慰めは人の顔を見る事でした。電車の中で向かい側にいる人々の顔を見ているとすべてを忘れ

る事が出来ました。電車賃のない時は、麴町の勤め先から本郷の自宅まで、空腹と疲労のからだをひきずって歩いて帰る事さえしばしばありました。その折りさえ途上に会おう沢山の人の顔が見られるので、どんなに苦痛をやわらげられたでしょう。本を読むよりも、人の顔を見る方がどんなによいか知れない、とよくその頃思つたものです。もともと本を読む暇も多くは持たなかったけれど、本を読むよりも私は人の顔から、どんなに多くの学問をしましたろう。

相者は人の顔を見て、その人の過去現在未来、その他いろいろの事をいいあてますが、全く人の顔にはその人の事は何でもありありと書いてあるものです。ただこれを読む事が大変むずかしいのです。

友人中川一政氏がかつていった事に、芸術家は作品を作るが、一方においておのずからその顔を作つてゆくものであるとありましたが、まことに然りと思います。芸術家でなくても誰も人の生活はその顔をつくることにあるともいえます。

人間が一生の苦心でつくられたその顔は、その人と共にどこへ行くのですか。私は友人知人の死面をいくつか石膏にとつたことがあります。死面はぬけがらです。その人の顔はその人の死と共に何処かへいつてしまふのです。思うと全く神秘です。

言葉は嘘をいう事ができましようが、顔は人を偽る事ができません。話を言葉だけで聞く人は真相を誤る事がありますが、顔から聞く時は先ず誤る事があります。

電話というものがありません。便利なものとは思いますが、私はどうも電話を好みません。それはなぜかと考えて見るに、相手の顔が見えないという事に大部分その原因があるようです。ほんの通り一遍の用談だけは済まされますが、少しこみ入った話になると電話では充分通じません。こう感じる人は恐らく私ばかりではなからうと思います。で、いかに私どもは平生顔によつて人と話しているかという事がわかります。顔がものをいい、顔がものを聞く、この働きは全く不思議です。

(石井鶴三『顔』)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

なまぬるいほこりがたつ焼津街道を、海の方に向かって歩いてい
と、前に行く若い女の人があつた。上林先生だつた。髪にも、水色の
スカートにもおぼえがあつたし、歩く時の肩の辺りの動かし方も、そ
うだつた。彼は駆けて行き、息を弾ませながら

先生、と声をかけた。彼女は彼が近づくの待っていてくれた。
彼は追いつぐと、自分でも思い掛けないことを言つた。

僕は物凄い油田を見ました。

またいつてしまった、と彼は思った。彼女はちよつと目を見張つて、
それなりに生まじめな表情になつて、しばらく考えていた。彼には、
なんだかしやくにさわるがあつたが、それを抑えなければ……、
という自制も働いていた。彼は自分のことを、緑ジジミの幼虫が、暗
くみずみずしい葉陰で、一人で翻転しているように感じた。

アメリカよりも、ボルネオやコーカサスよりも大きな油田です。
気がつく、彼はそう深くいつのつていた。彼女は、浮世絵人形
のような表情を動かしはしなかつた。彼は自分が自然にしゃべつてい
るのを感じた。そして、なにをいつてもいいのなら、いうことは一杯
あるぞ、と思つた。自分で自分に深傷を負わせてしまい、血が止まら
なくなつた感じだつた。彼はまたなにかいおうとした。すると彼女
が、いつもの口調できいた。

それは、どこなの。
大井川の川尻です。
大井川の川尻……。あんなところだつたの、と彼女は少し声をふ
るわせていつた。浩には、彼女が胸を弾ませているのがわかつた。
駄目だと思ひながらもたいた扉が、意外にも手応えがあつて動き
始めたようになつた。彼は自分の嘘の効果が、怖ろしく美しく
彼女に表れたことに呆然としていた。

大井川の鉄橋から見えるかしら。
見えると思いますけど。
それじゃ、柚木さん、わたしこれから見に行くわ。そこへ連れて
行つて。

鞆をうちへ置いてきていいですか。
鞆はいいわよ。持っていらいっしやい。

遅くなつてお母さんが心配したら、先生があとでわけ話して上げ
るから。

……。
軽便で行くのね。
え、ええ軽便でいいんです。

浩は仕方なく歩き出した。軽便の駅までは大分距離があつた。う
しろでは上林先生の運動靴の足音が、ひっそりと、しかし確実にして
いた。彼はどこかへ迷ひ込みたかつた。迷つてしまつたような芝居を
したかつた。だが、彼の前にあつたのは、そんな芝居に紛れて行きよ
うもない、一から十まで知りつくした道だつた。

(小川国夫『生のさ中に』)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

門松がとれてまもない日曜日、娘は庭でなわとびをしていて、白鳥がすぐその東の山に舞いおりるのを見つけた。まっ白い鳥だから、白鳥といってまちがいはないけれども、童話に出てくるあの白鳥ではない。白サギである。

そういうと娘はちよつぱりがつかりしたようだったが、図鑑を持ちだしてきて調べはじめた。「サギの仲間」のページをひらき、松のこずえに翼を休めている白鳥と見くらべている。

「頭にチョンチョリンがないから、コサギでもアオサギでもないわ。チュウサギかチュウダイサギよ。かたちがそっくりでしょう。」

なるほど、そのどちらかである。二羽いて、松のこずえに巢のあることがわかった。どうやら、カラスの古巣を占領したらしい。たんぼや小川の水がすっかりかれてしまったので、小さな池のあるその山へ引越してきたのだろう。

そういえば、十年ほど前にも、ひとつがいの白サギがその同じ場所に冬のあいだ住んでいたことがあった。娘は幼かったのを忘れてしまったのか、それとも彼女が生まれる前だったろうか。

(中略)

サギの寿命がどれほどか私は知らないが、こんどきた白サギは十年前のサギではなく、その子供たちか孫たちであろうか。いずれにしても、十年ぶりの白鳥の再来である。

私の娘はその白鳥のことを人にうつかりしゃべると、わんぱくどもに石でも投げられて、鳥が山を去ってしまうのではないかと恐れているのだった。そして、宝物をそつと小箱にでもしまいこむように、自分だけの秘密としてながめていたい。私にしても同じ気持ちである。

しかし、白サギを小箱にしまうわけにはいかない。まっ白な鳥が空を飛ぶのだから、近所の人はだれも気がついていて。そのだれもが、気づいていて、知らんふりをしている。自分だけが知っている秘密だと思ひこみたいのである。

ある日、妻が道に出ていると、幼稚園に行っている近所の男の子が顔をまっかにして走ってきて、息をはずませながら妻にいった。

「ぼく、いま白鳥にさわっちゃった。ほんとだよ。でも、おばさん、ないしよだよ。白鳥のこと、ぼくしか知らないんだから。」

その話を私にした妻は、しかしこのことは娘には黙ってしましうよといった。娘に話せば、彼女が自分だけの秘密をとられたようにがっかりするだろうからというのである。娘にすれば、白サギにちよつとでもさわってみたいと、どんなに願っていることだろう。

ところが、娘がひとりで白サギをそつと見にいったある日、猫に追われて妙な鳴き方をして彼女の前へ山から走り出てきた一羽の小綬鶏を猫から救ったのだった。

「びっくりしちやった。あんなことってほんとうにあるのね。わたし、小綬鶏を助けてあげたのよ。でも、これもほかの人にはないしよ。」

その日から娘は、小綬鶏に与える一握りの米をかくし持って、白サギと小綬鶏を見に、そしらぬふりをして山へ出かけていくようになった。命を助けてやった一羽の小綬鶏も、彼女の秘密にくわわったのだ。

やがてその小さな山に、小綬鶏たちがめざましい声でさえずる春が訪れる。私が徹夜の仕事を終えて外をのぞくと、まだだれもが眠っている夜のしらしら明け、母親鳥を先頭にひなたたちが一列に並び、しんがりを父親鳥がうけたまわって、小綬鶏の一家が道を散歩している姿を見かける。その季節には白サギの夫婦は山を去っているだろう。

だが今年は、私の住む町の近くに、彼らのもどつていく水田があるだろう。わずかに小綬鶏たちが住みついている東のちつぽけな山も、市の保存林としての期限が数カ月後には切れる。それを知っているから、わが家の近所の人たちはおとなも子どもたちも、十年ぶりに山にやってきた二羽の白サギを、ひっそりとながめているのかもしれない。それぞれの夢を白鳥に託しているのである。

(佐江衆一『それぞれの白鳥』)



ひとりの人間の内部に発生している状態と極めてよく似た状態が、もうひとりの人間の心の内部に生ずる過程、それが共感である。そして、それはしばしば、生理的な次元でも発生する。

たとえば、痛みの経験だが、母親と子どもといった細やかな関係のなかでは、痛みに単に想像上経験されるだけでなく、実際の生理的な痛みとして体験されることがある。子供が、「痛い」というたびに、母親もその部分がほんとうに痛くなったりするのだ。

もつと単純な生理的共感とは、たとえば、乳離れしたばかりの幼児にものを食べさせたりする時の親子の情景を思い浮かべてみればよくわかる。子どもにアーンと口をあげさせるとき、自然と親の口も、そんなふうに関わられてしまう。親が口をあげるから子どもがそれを模倣しているのだともみえるが、子どもが口をあげるのに釣りこまれて、親が口をあげてしまうようにもみえる。そんな経験は、だれでももっているはずである。

親しい人間同士を形容して、「ともに笑い、ともに泣く」という表現が使われるのは、このような共感能力と関係する。ある人間のよこびがそのままもうひとりの人間のよこびになる、というのは、ふたりの人間の間に高度な共感が成立するということだ。ひとの悲しい経験に「もらい泣き」したり、おもしろい話に「釣りこまれ」たりという表現は、すべて人間同士の間ではたらく共感のふしぎな作用を表しているといつてよい。この共感作用は、「同一化」ということばで説明される過程とかさなりあう。同一化とは、相手方の置かれている状況だの、相手方の内部で発生している状態だのと似た状況や状態を体験することだ。それは、われわれが映画を見たり、小説を読んだりするときのことを思い出してみたらいい。

たとえば、手に汗をにぎるような大活劇というのがある。映画館のスクリーンの上では、ビルの屋根の上をとんで渡ったり、スポーツカーで追跡をしたり、という活劇が展開している。それを見ているうちに、われわれはその活劇に釣りこまれる。スポーツカーが走りまわっている場面では、あたかも自分がその自動車を運転しているような気持ちになって、目の前に突然ガケが現れたりするとハラハラしてしまう。ビルの屋上に追いつめられて、隣のビルにとび

移る場面では胸がドキドキする。まさしく「手に汗にぎる」のである。そして、そのときのわれわれは、映画の中の登場人物に自分自身を置きかえているとはいえないか。

小説を読んでいるときもそうだ。主人公の境遇だの、人生の設計の仕方だの、われわれは小説を読み進めるにつれて、主人公の立場と自分とを密着させてしまう。主人公が悲しければ、読者であるわれわれも悲しくなる。主人公がよろこばれわれもよろこぶ。われわれは主人公の「身になって」しまうのである。

共感あるいは同一化が、どんなふうにしてわれわれの内部で発生するのかはよくわかっていない。しかし、われわれは事実の問題、あるいは体験の問題として、共感の現象があることを知っている。われわれは「相手の身になる」能力をもっているのである。

（加藤秀俊「人間関係」）



書物はいつの世にもゆっくりと読むべきものだと思ふ。こんなにも本がたくさん出ているのに、と言うかもしれない。しかし、同じようにレコードだつてたくさん出ている。展覧会も至る所で開かれてゐる。だからといって、音楽を能率的に聴き、絵画を急いで見る人はいまい。それなのに、こと本に関する限り速読を目指すのはどういふわけなのだろう。おそらく、書物というものが鑑賞するといふより知識の伝授の媒体と思われているせいであろう。確かに本とレコードでは違ふ。本のほうがはるかに多目的である。鑑賞するといふよりは、情報を得たいために読まれる本のほうがずっと多いだろう。そんなことは十分承知の上で、なおかつ、私は遅読を勧める。速く読むといふことは一見能率的のように思えるが、結局は損をする

ことになる。私も必要に迫られて急いで読まざるを得ないことがある。ところが、急いでよんだ本に限って、あとに何も残っていない。そこで、もう一度読み直さなければならぬことになる。そして、改めてゆっくり読み直してみると、最初に読み飛ばしたそんな読書が何の意味も持っていないどころか、全く読み違えていたことに驚くのである。こうなると、速読するよりは読まないほうがましである。なぜなら、誤解は無知よりも有害だからである。

そんなことを言つても、必要に迫られて読まなければならない場合が多いではないか、と言うかもしれない。しかし、必要に迫られたらなおのことゆっくり読むべきである。必要に迫られる以上、あくまで誤解は許されないからだ。たとえ明日までにどうしてもこの一冊を読み上げねばならないという必要に迫られた場合でも、ゆっくりと読み、読めるところまで読んで本を閉じたい。そのほうが、いい加減に斜め読みをするよりは、はるかに得るところが大きい。

遅読を勧めるもう一つの理由は、いくら速く読んでみたところでたかが知れているといふことである。どんなに速読の技術を身に付けたところで、二倍のスピードで読めるものではない。仮に二倍の速度で読めたとしても、そうした速読から読み取ることができるのは、ゆっくり読んだときの二分の一に過ぎない。つまり、半分しか読み取らないのだから二倍の速さで読めるわけだ。しかも、その半

分が前に述べたように誤読に陥りやすいとすれば、速読といふものがいかに無意味であるかに気付くであろう。実際、本といふものはそんなにたくさん読めるものではない。わずかな本しか読めないからこそ、何を讀むかその選択が大切になる。つまり、ゆっくり読むことは、それだけ良書を選ばせる効果を持つのである。

わずかな本しか読めなかつたなら、それだけ視野は狭くなり、とても現代に追い付いていけないといふかもしれない。確かにそういった不安が現代人を速読へと駆り立てている。だが、そんなことは決してない。十冊読む人よりも五冊読む人のほうが視野が広く、立派な見識を身に付けているといふようなことはざらにあるのだ。読書の価値は何冊読んだかで決まるのではなく、どんな本をどのように読んだかで決まるのである。

私は、読書とは「葦の髄から天井をのぞく」ことだと思つてゐる。ふつうこの言葉は、そんなちつぽけな穴から天をのぞいてみても、広大な天のほんのわずかな部分が見えるだけだ、とその視野の狭さを笑つたものと解されている。確かにそういう意味だろう。しかし、実際にのぞいてみると分かるが、葦の髄からでも結構天は仰げるのである。いや、むしろ小さな穴からのぞいたほうが対象がよく見えることも多い。

とにかく、本はゆっくり読むに限る。ゆっくり読めば一冊の本はどれほど多くを語ってくれることか。読書とはただそこに書かれていることを理解するといふ単純な作業なのではなく、いかにして、書物により多くのことを語らせるかといふ技術なのである。それは、優れたインタビュアーが相手からおもしろい話を十分に引き出すことができるようなものだ。性急な読書では本は何も語ってくれはしない。仮にその内容を要領よくつかんだとしても、ただそれだけの話である。それは本を読んだというより、本をつかんだというに過ぎない。

読書とはあくまで著者と読み手の対話なのである。読み手が時間をかけてゆっくりと問いかけなければ、著者は、それこそ通り一遍の答しかしてくれないのである。

(森本哲郎「遅読術」)



まずレンゲを一株だけ、根ごと掘りとつてみる。力まかせに抜くのではなく、棒切れか竹べらか、あるいはナイフを土に突き立てて、なるべくそつと掘り上げる。指でつまんで土を丁寧にもみほぐすようにして落とすと、根があらわれる。付近の用水溝の水で洗ってみると、いっそう根の様子がよくわかる。一本の太い根と、枝分かれしたたくさん白っぽい根がある。そのヒゲ根のあちこちに、米粒形の長さ三・五ミリほどの粒がたくさんくっついていているだろう。少し赤みがかったいる。

この粒が曲者だ。これはじつはチツソ工場なのである。この中に根瘤バクテリアという特別な細菌が住んでいて、根のまわりやすき間などの空気の中のチツソ化合物に変える働きをしている。稲刈りをした後の田んぼにレンゲの種子をまいておくと、翌年の田植えまでの間にレンゲが生長し、根に粒ができて多くの水溶性のチツソ化合物が生産され、レンゲはこれを栄養にしますます生長する。これをスキで掘り起こし、くだし、土と混ぜる。つまり肥料にするわけで、緑の草の肥料という意味で「緑肥」と呼ぶ。現金収入の乏しかった農家が、科学肥料を買わずとも田んぼの土を富ませられる手段だったわけである。

この方法は昭和十年代が最盛で、二十年代には半分に減った。最近では人手不足の代わりに現金収入のふえた農家が、手間の簡単な「金肥」——化学肥料をどしどし使うので、田園全域が赤い花に敷きつめられるという風景は少なくなった。レンゲはもともと日本に

は生えていなかった、と考えられる。中国大陸の原産で漢名を紫雲英または翹揺と言ひ、「緑肥」として栽培がさかんに行われ出したのは明治中葉と言われている。

レンゲの花が終わり、野を占めるものの主役が虫媒花からイネ科の風媒花に変わるころ、田園の風景はにわかに色どりを失う。小学校の図画の時間、私も、級友たちも、いっせいに緑の絵の具が欠乏したものだ。赤やピンクや紫など、派手な色を使いたいのはやまやまなのだが、見渡してみても、空は青、山は緑、屋根は草ぶきで

焦げ茶色。色数はそれだけしかないのだ。だから、春の野の花の鮮やかさは、農民たちには一種の救いであり、よみがえり来る生の季節の象徴として喜ばれたのだろう。キンセンカ、ヤグルマギクに始まって、種子とりには必要なら多量のシンギクの花が、抜きとられもせずに咲くにまかせてある。不精なのではない。単なる風流でもないように思われる。少しでも風景を色どりで豊かにしようという心がけてきた農民魂のあらわれなのである。

かつて大和の飛鳥ではレンゲ論争というのがあった。村長さんが音頭をとつて、農家にレンゲの種子を配り、休閑田にまこうと奨励した。観光客の誘致のためである。「日本のふるさと」というキャッチ・フレーズのポスターには、ぜひとも野にみちるレンゲの赤が必要だ。レンゲにうずまる田園こそ、訪れた都会人たちの心をなごませ、楽しかった少年時代への郷愁を呼ぶ——。植物学者のKさんがこれに抗議した。もともと日本にレンゲはなかった。古代の飛鳥の風景はもつと淡彩素朴であった。飛鳥が「日本のふるさと」ならば、そうした「ふるさと」の真実を訪問者に知らせることが大切なのだ。レンゲまきをすすめるなど邪道だ——。

春に咲く野の花は、黄色の花が多い。量の多いタンポポやジシバリ類、キンポウゲ類、ヘビイチゴ類がすべて黄色で、白い花はハコベにしてもタネツケバナにしても小形で目立たない。これでレンゲがなかったのだから、古代日本の田園の風景は、もつと地味で寂しい眺めだったにちがいない。そのような風景を眺めて、私たちの祖先は暮らしていたのである。

(日浦勇『自然観察入門』)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

最近、「手づくりの味」ということが盛んに評価されている。文字どおり人間が素手で、せいぜい小道具を使う程度で、つまり大型の機械力を頼らずに作り出した製品についていわれるのが、この言葉である。かつては質素な日用品であり、今や趣味の対象と化した産物に対し、「民芸品」または「工芸品」という新しい呼称が付けられるようになった。手づくりの味の再評価とは、言い方をかえると、民芸品ブームということになる。

伝統保存のため作られているという薩摩がすりの場合を考えると、必需品ではないまでも、日常の衣類として着ることが可能である。つまり現代社会において、実用品としての機能も、まだ保持しているわけである。ところがもつと極端になると、例えば自分たちで手づくりの「わらじ」をこしらえ、これを履いて楽しんでいるグループがある。わらじは、実用的意味を今ではほとんど持っていない。そういう非日常的な希少性だけが、その存在を支える価値だと言えよう。

民芸品と呼ばれる産物と、その昔の同種の製品とが似て非なるものであることは、製作された環境に目を向けた時、明らかになっている。現在、そのような民芸品を職業として作っている。そういう人の数は多くないが、世間はこの人々のことを、職人よりも芸術家として待遇する。また、職業ではなく趣味として、手づくりに精出している人々もいる。作ること自体が楽しみなっている。生活に追われているだけでは、とてもできないことで、ある程度のゆとりがあればこそ、そういう世界に浸れる。これは一種のぜいたくと言えるであろう。日曜大工にしても同様で、家計の補助にと、無理して作っている人もないことはないかもしれないが、それが主流とは考えられない。日曜大工のほとんどは、余暇の利用を兼ねた一石二鳥にちがいないのである。今の民芸品が日用品だったその昔、こういった状況はどうてい考えられなかった。日用品の大部分は、貧しい民衆が生活に追われ続けながら汗水たらして作っていたのである。最近の「手づくり」への回顧趣味を見たとき、このあたりに根本的な誤解があるように感じられてならない。民芸品の独自の個性を愛好することは自由である。しかし、それはあくまでも民芸品であって、その昔の相似の製品とは別のものである。民芸品をな

がめ、「明治以前の日本人はこんなすばらしい技芸を持っていたのに、今は全く顧みず、機械文明のあとばかり追っている。」と、したり顔に批判する現代人こそ、恐れを感じてしるべきではあるまいか。かつてそれらの産物を作り出した民衆が、その境地からの脱出をどれほど渴望し続けたことか。その中から生まれたものこそ、今の民芸品の原型だったのである。

（筑波常治「自然と文明の対決」）



ものを移すとき、いちばんやさしいのは物理的な移動である。任意のとき、任意の場所へ、そのまま移動できる。移されたものは、前の場所と新しい場所の違いなどによつてほとんど影響を受けるということはない。たとえば、ヨーロッパから運ばれてきた机は着いた瞬間から机としての機能を発揮する。

明治以来、わが国はおびただしい品物を外国から輸入してきた。品物は、手を加えずにそのまま移動できるので、手間がかからなくてよい。その方法を精神的文化財の輸入にあたっても適用してきたのではあるまいか。外国で流行していたり、重視されていたりする学問や芸術があると、すぐにそのまま持つてくる。なにしろ、これまで外国の学問をしてきたのはえりすぐりの人たちであるから、学問、芸術についてこのように物理的な移動が、一応はできたように見えるのである。そして、人々は、しだいに文化が無生物ではなくて生命を持った有機体であることを忘れた。

学問や芸術のような生き物を移すのは、植物的な移動、すなわち、移植でなければならない。たとえば、どんな小さな木でも移すとすれば品物を動かすように簡単にはいかない。まず、移植できるかどうかをあらかじめ考える必要がある。どんなにきれいな花が咲いているからといって高山植物を自分の庭先に移植することはできない。受け入れ側の風土、地味、気候などがその植物に適合しているときにはじめて、移植が現実の問題になるのである。すぐれたものならなんでも、どこへでも移すことができるようにわれわれは考えがちであるが、根づかぬものはいくらでもある。

外国の文化を取り入れようとするとき、なるべく元のままを、というのは人情であるが、これも移植の立場からすると考え直す余地がある。移植ということは植物にとつて恐ろしい危険を伴う試練である。少しでも余分なものは取り除いて負担を軽くしなくてはならない。移植が枝を落として行われるのはそのためである。あるがままのものをあるがままの姿でそっくり移すというのは、ことばの上だけならばともかく、実際にはきわめてむずかしい。

では、そういう困難をおしてまで移植する必要があるとはしてあるのだろうかということになるのだが、よそに咲いている花が美しいということになれば理屈抜きでほしくなる。そこでいちばんてっとりばやい方法は、一枝手折つてきて花びんに生けておく手である。しかし、一時は美しくても、こういう花の命が短いのは当然である。われわれの最も多くお目にかかる外国文化の紹介は、この手の生

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

け花的なもので、移ろいやすい。日本には昔から、桃くり三年かき八年ということわざがある。植えてもすぐ実がなるものではないという教訓である。外国の文化を紹介しようとしている人が、この程度のことを、文化の移植に関して考えていないとしたら奇妙なことである。それはおかげささいえは移植の美学ともいふべきものだが、そういう関心が欠けていて、外国の文化がどうのこうのというのは、とにかく外国からものを買つてきて、上等の品物であると得意になつていくようなものである。日本独自の文化が育たないのはむしろあたりまえのことであろう。移植した木が、根もおろさず新芽も出さぬうちに、もう次の木をすぐ隣に移してくる。八年はおろか三年も待つていては時代に遅れてしまうように思う。しかも、移してくるものが、申し合わせたように花盛りのものであればかりときている。こういうものは、新しい土壌に根づいて、新しい花をつけるまでに、特別に長い時間を要するはずである。それを待つほどわれわれは気が長くない。性急に次の花に手を出す。これではいつまでたっても大木は育つまい。

明治以来、わが国はずいぶん無理な文化移動を重ねてきた。移植の美学などにかかわりあつていられなかったのはいたしかたもないことであろう。しかし、これを全部不毛なりと決めてしまふのはどうであろう。島国という文化風土は、外来のものをなかなか受け入れない性格を持つているといわれる。百年にわたる欧米文化の摂取によつて、地味もだいぶ変わつてきた。欧米から移されてくるものにもいくらかなじむようになっていく。これまでに移植されて、もうだめかと思はれていゝる木の中からも、ひよつとすると、そろそろ新しい芽を出すものが現れるのではなからうか。なんでもかんでもだめだという絶望こそ、植物を立ち枯れさせる有害な病氣である。

ユネスコが明治以降のわが国における翻訳についての調査をするらしい。この調査も、これまでの移植のあとをもう一度振り返つてみて、どの木がよく育ち、どれが枯れたかを調べようとするものだと解される。おもしろい仕事である。大がかりな調査はともかく、われわれ個人としてもよく考えてみるべき問題であろう。

(外山滋比古「日本語の個性」)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

ある夏の、ひどくむし暑い日のことだった。上の兄は学校へ行き、私と下の兄とだけが残されて、退屈していた。二人はただ目的もなく大堰ばたの方へ歩いて行った。大堰ばたの水は流れが止まったように淀んでいて、岸には雑草がしげり、日ざしはじりじりと照りつけていた。そのとき兄は水面に近く、鮒を見つけたのだった。

鮒は水温が上がり過ぎたために、苦しがつて水面に浮かび、口をあけて喘いでいた。それが意外にも五匹、六匹……十匹もいた。私たちは興奮した。兄は流れの岸にうずくまり、手近なところに浮いている小鮒をそつと両手で追ってみた。鮒は逃げるだけの気力もなく、黙って兄の手に捕らえられた。それからが大変だった。水から上げたら魚は死んでしまう。鮒を水の中で捕らえたまま、兄はどうすることもできなかった。兄は顔だけをふり向けて、

「おい、うちへ帰って何か入れ物を持って来い。あき缶でも何でもいい。太急ぎだぞ」と言った。

私は柔順な弟だった。いつも兄たちの命令には絶対服従だった。私は言いつけに従っていきなり走り出した。私自身、生きた鮒を持って帰りたくもあった。だが、そこから私の家までは二百メートル以上もあった。私は日盛りの、人通りの絶えた乾いた道を小さな下駄を鳴らして夢中になって走った。汗を流し、暑さに喘ぎながら家まで帰りつくど、あき缶を一つ見つけ出して、また同じ道を引き返した。その途中で、石につまずいて転び、膝をすりむいてしまった。私は痛みに耐え、泣きながら走った。それほど私は柔順な弟だった。そして兄を怨んでいた。川岸まで駆け戻ってみると、兄はまだ元のところへうずくまって、一匹の小鮒を両手でつかまえていた。兄は家に帰ってから、（おれが獲った鮒だ）と言った。私はそれが不満だった。

鮒よりも、私はトンボが好きだった。一番大型のオニヤンマは大型という魅力はあるが、黒と黄色のんだら縞で下品だった。つか

まえたことのうれしさはあるが、少年の心を陶醉にさそう「美」がなかった。そこへいくと、ギンヤンマという、あの中型のヤンマの美しさは私をうつとりさせた。私はほとんどヤンマを尊敬していた。夕方になると、時として私の家の前の道路に、無数のヤンマが飛んでくるのがあった。おびただしい数だった。ところがその時刻がちやうど私の家の夕食だった。夕飯を食べながら、私は気が気ではない。箸を投げ出すなり土間に飛び降り、下駄を突っかけると同時に竹竿をつかんで駆け出す。ヤンマの群れの中で、やみくもに竹竿をふりまわすと、羽が切れたり、尾が切れたりして落ちてくる。時として全身無傷のヤンマを取ることがあった。これは私たちの宝物だった。魚籠に入れて、布でふたをして、持って帰る。小部屋を閉め切つて、ヤンマを飛ばしてみる。その飛び方の優雅さに私は見惚れるのだった。

（石川達三「私ひとりの私」）



読解問題 4月4週分

問1 読解マラソン集1番「母の死後、半年ほどすると」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 僕は、兄となるべき人を好きになれなかった。

B 姉は、自分の結婚によって僕と父が取り残されることが気がかりだった。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番「母の死後、半年ほどすると」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 僕は、自分の知らないところで話が進められていることに反発を感じた。

B 父は、桂おばさまと結婚してもよいと思っていた。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「日本人の文化は、共感の文化であると」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 日本人は、他人と目を合わせたくないために電車の中で眠る人が多い。

B 日本人は、相手と共感する際に、特にことばを必要としない。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「日本人の文化は、共感の文化であると」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 日本人は、みんなが内心同じ考えを持っているので、一体感を持ちやすい。

B 情報化時代には、マスコミよりもミニコミの方が大事である。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「イギリス人は、なぜお茶に砂糖を」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 十七世紀のイギリスでは、茶も砂糖も煙草も貴重品だった。

B 紅茶に砂糖を入れるのは、味をよくすることが「ステイタス・シンボル」となるからであった。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「イギリス人は、なぜお茶に砂糖を」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A イギリスでは、お茶を飲む習慣は、財力のある大商人から始まった。

B 日本酒に金箔を入れるのは、紅茶に砂糖を入れるのと同じような意味である。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「私ども彫刻に志すものが」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 彫刻家は、皮膚や髪の毛の色などよりも、目鼻や口などに関心を持つ。

B 彫刻家の勉強で大切なことは、他人の作ったものをよく見ることである。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「私ども彫刻に志すものが」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 「人の生活はその顔を作ることにある」とは、顔にその人の人生が表れるということである。

B こみ入った話が電話では充分に通じないのは、顔が見えないからである。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 5月4週分

問1 読解マラソン集5番「なまぬるいほこりがたつ焼津街道を」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 彼は、大井川で油田を発見したことを彼女に知らせたかった
B 彼女は、嘘だとわかっていたが、彼をからかおうと思ってだまされたふりをした
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「なまぬるいほこりがたつ焼津街道を」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 「血が止まらなくなった」とは、「嘘の上塗りをするようになった」という意味である
B 彼は、嘘をついて彼女の関心を引く作戦だった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「門松がとれて」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 十年前、その山にはたくさんのサギがいた
B 二羽のサギが山にすみついたことを知っているのは、近所の人でもまだわずかである
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「門松がとれて」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 娘は、サギに食べさせるエサを持ってときどき山に行く
B サギがエサを取れるような水田や小川は、もう近くにはないようだ
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「ひとりの人間の内部に」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 子どもが「痛い」というとき、母親が同じ痛みを感じるのは想像上の経験である
B 私たちは、現実の人間に対してだけでなく、映画や小説の中の人間に対しても同一化を感じる
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「ひとりの人間の内部に」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 映画に熱中するとき、私たちは、映画の中の登場人物に自分自身を置き換えている
B 相手に対する共感がどのようにして発生するかは、まだわかっていない
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「書物はいつの世にも」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 速く読んで誤解するよりも、読まない方がいい
B 現代では、鑑賞するための本よりも、情報を得るための本の方が多い
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「書物はいつの世にも」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A ゆっくり読むことによって、同じ本がより多くのことを語ってくれる
B 本をたくさん読んでいる人の方が、視野が広いことが多い
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 6月4週分

問1 読解マラソン集9番「まずレンゲを」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 昔は、イネの田植えと一緒にレンゲを植え、土中のチッソ化合物を増やした
B 昔の農家は、化学肥料を買わずにレンゲのチッソ化合物を肥料として利用した
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集9番「まずレンゲを」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A レンゲは虫媒花で、イネは風媒花である
B 古代の日本には、赤いレンゲはなく、白いレンゲが咲いていた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集10番「最近、『手づくりの味』ということが」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 現代の「民芸品」は、芸術や趣味の領域として作られているものが多い
B 今でいう「民芸品」を実用品として作っていた昔の職人にも、芸術的な志があった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集10番「最近『手づくりの味』ということが」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 明治以前の日本人は、すばらしい技芸を持っていたが、それは手作りを趣味としていたからである
B 昔の民衆は、自分たちの作ったものに芸術的な価値が認められないという境地からの脱出を渴望していた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集11番「ものを移すとき」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 文化の輸入は、品物の輸入のようにではなく、植物の移植のように行う必要がある
B 文化の輸入は、元のみではなく、自国の風土に合うように変えて行う必要がある
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集11番「ものを移すとき」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 文化の移植は、花盛りの時期ではなく、実をつけた時期に行うことだ
B 文化の地味が変わってきた現代では、切り花的な移植も可能になりつつある
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集12番「ある夏の、ひどくむし暑い日」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 夏の暑い日、兄は、水面に浮いている鮒を手でつかまえた
B 私は急いで家に帰る途中、ころんが泣きながらも走りつづけた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集12番「ある夏の、ひどくむし暑い日」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A ギンヤンマは、オニヤンマよりも小さいが、私はギンヤンマが好きだった
B 竹竿に当たって落ちてくるヤンマの中には無傷のものもいた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

4～6月

小1 コード: nane ス:	小2 コード: nane ス:	小3 コード: nane ス:
小4 コード: nane ス:	小5 コード: nane ス:	小6 コード: nane ス:
中1 コード: nane ス:	中2 コード: nane ス:	中3 コード: nane ス:
高1 コード: nane ス:	高2 コード: nane ス:	高3 コード: nane ス:

1～3月

小1 コード: nane ス: PDF	小2 コード: nane ス: PDF	小3 コード: nane ス: PDF
小4 コード: nane ス: PDF	小5 コード: nane ス: PDF	小6 コード: nane ス: PDF
中1 コード: nane パス	中2 コード: nane パス	中3 コード: nane パス

ス： PDF	ス： PDF	ス： PDF
高1 コード： nane パ	高2 コード： nane パ	高3 コード： nane パ
ス： PDF	ス： PDF	ス： PDF